

各店舗でフラワーアレンジメントを展示

「職場に花を」運動



JA筑紫では、3月2日～31日まで「職場に花を」運動として、福岡県産の花きを使ったフラワーアレンジメントを展示しました。

これは、新型コロナウイルス感染症の影響で需要が減少している花きの消費拡大を図るため、JAグループ福岡が取り組んでいます。JA筑紫では、3月末までJA管内の本店や営農センター、金融店舗29支店出張所で、毎週異なるアレンジメントを展示。県産の花きを展示することで、生産者の経営安定や経営継続を後押ししました。

JA食農推進課緒方一寿課長は「これを機会に花きの販売拡大につながると嬉しいです」と話しました。

筑紫神社の伝統行事「粥占祭」



筑紫野市の筑紫神社で3月15日、かゆに生えたかびを見てその年の農作物や天候の豊凶などを占う「粥占祭（かゆうらまつり）」が行われました。かびの生え具合や色で占った結果、全般判断は「中下」。また、天候面では雨が「少なし」、稲作の作柄は「中下」、麦作の作柄は「中上」と出ました。

祭りは毎年行われる伝統行事で、200年以上の歴史があり、市の無形民俗文化財にも指定されています。

占いに使うかゆは、2月15日に行われた「粥納（かゆおさめ）」で神職が炊いたもの。1カ月たって取り出したかゆの表面を判断委員が確認しました。

味酒安志宮司は「今年は災害や病害虫の発生なく、無事に農作物の豊作になるようお祈りしたいです」と話しました。

春芽アスパラガス高品質へ規格徹底



JA筑紫アスパラガス部会は3月16日、筑紫野市のJA資材配送センターで定例会を開きました。部会員や福岡普及指導センター、JA筑紫担当職員14名が参加。出荷規格や基準などについて部会員で意見交換や目合わせを行いました。

部会の春芽アスパラガス出荷は2月中旬から始まり、現在最盛期を迎えています。今年の生育は暖冬の影響で例年よりも早く、おおむね順調。

高石光幸部会長は「高品質なアスパラガスを出荷するため、今回の目合わせで規格などの基準をしっかりとそろえましょう」と呼びかけました。

部会は、高品質なアスパラガスを出荷するため、目合わせや圃場巡回を定期的に行っています。

農作業を安全に

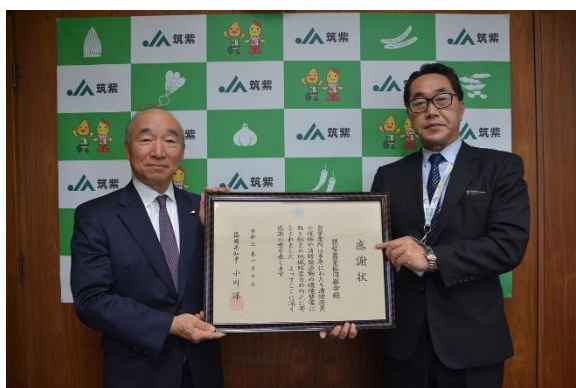


J A筑紫麦出荷者部会は3月18日、筑紫野市のJ A物流センターで農作業安全講習会を開き、部会員21名が参加しました。

この講習会は、農作業事故につながる原因や作業前、作業中の安全チェックなどを再確認することが目的。今回は草刈り機の正しい使い方や、使用上の注意点を学びました。

久原暢部会長は「近年J A管内でも事故が発生しています。事故が起きないように、作業を慎重に行ってほしいです」と話しました。

福岡県消防団協力事業所として県から感謝状



J A筑紫は「福岡県消防団協力事業所」として福岡県知事表彰を受けました。

管内5市で消防団員として活動しているJ A職員は約80名。団員の確保や活動の環境整備に取り組んだことが評価されました。1月の消防出初式で表彰を受ける予定でしたが、新型コロナウイルス感染拡大の影響により中止となり、J A組合長室で伝達式を実施。J Aの白水清博組合長は、管内5市を代表して那珂川市役所の江頭哲次市民生活部長から感謝状の伝達を受けました。

この表彰は、事業所の消防団活動への協力が社会貢献として広く認められると同時に、協力を通じて地域防災体制をより一層充実させることを目的としています。

家畜への感謝と冥福祈る



J A筑紫は3月19日、畜魂祭を筑紫野市のJ A本店にある畜魂碑前で執り行いました。

J A肥育牛部会や養鶏農家、J A役職員17名が参列しました。

筑紫野市阿志岐の圓徳寺の住職が読経し、白水清博組合長や参加者が献花。家畜に感謝の気持ちを込めて供養しました。

無人ヘリ安全にヘリ防除を



麦刈りシーズンを前に、3月29日からJ A筑紫無人ヘリ防除作業部会による「イチバンボシ」「チクゴイズミ」の防除作業が始まりました。2021年度麦防除作業の面積は約195ha。作業は4月下旬まで続きます。

部会は、部会員10名で無人ヘリ2台による米・麦・大豆防除に取り組んでいます。適期防除をするために圃場巡回を行い、作業効率上がるような散布計画を立て、安全作業に取り組みます。

J Aの担当職員は「安全第一で防除作業に努めたいです」と話しました。

チャイルドケアセンターへ元気つくし1俵を寄付



JA筑紫稲作部会は3月25日、大野城市の認定NPO法人チャイルドケアセンターへ米「元気つくし」1俵（60kg）を贈りました。

部会では、例年スーパーなどで県産米販売促進活動を実施していますが、今年は新型コロナウイルス感染拡大防止のため実施を断念。そこで、JA管内でとれたブランド米「筑紫米」を知ってもらうとともに、多くの子ども達の成長に貢献したいと企画しました。

法人は、子育てのための情報とネットワークづくりをサポートする団体。JA管内5市に50カ所で、ボランティアが地域で暮らす大人や子どもを対象に設ける、食事の提供や交流する場「子ども食堂」の支援を行っています。

米を受け取った法人の担当者は「大変ありがたいです。子ども食堂を楽しみにしている人達のためにも早く届けたいです」と笑顔で話しました。

市長と地域農業について語り合う



農事組合法人あしきは3月下旬、筑紫野市のJA阿志岐出張所で行われた筑紫野市の「移動市長室」に参加しました。

藤田陽三市長が自ら各地域へ出向き、市内で活動する団体などと対話を行うもの。市の情勢や市民のニーズを把握し、今後の市政に生かすことを目的に、月1回程度行っています。

藤田市長が「皆さんの活動内容や思いを聞かせていただき、これからの市政に生かしていきたいです」とあいさつ。組合員は組合の歴史や現状を説明。その後、市長と組合員は法人のアスパラガスのハウスを視察し、意見を交わしました。

法人は2011年7月に設立し、現在は阿志岐地区に住む生産者18名が所属。経営面積約26haで米や麦、大豆などを作付けし、2019年からは高収益事業としてアスパラガスを栽培。また、地域のボランティア活動などにも積極的に取り組んでいます。

法人の中原善幸組合長は「組織間や関係する機関と連携をとりながら地域の農業を守り続けていきたいです」と抱負を述べました。

種ショウガ出荷開始



JA筑紫生姜出荷組合は、3月19日と25日に筑紫野市の山口倉庫で、種ショウガ約1350kgを種苗会社へ出荷しました。出荷組合員と種苗会社社員、JA農業振興課職員は、今年の種ショウガの出来具合などを確認しました。種ショウガは、種苗会社を通して全国に出荷されます。

生姜出荷組合の人数は6名。講習会や巡回、視察なども積極的に行い、品質管理の徹底に一丸となって取り組んでいます。

JA担当職員は「今年は全体的に病気の発生が少なく、天候に恵まれました。今後も高品質なショウガを出荷してほしいです」と話しました。